



天気予報はコンピュータで出すの

初めに気象データ(情報)が集められる

天気予報を出すには、天気の様子や、気圧・気温・風向・風力などを、毎日決まった時間に、決まった方法で調べることが必要です。

天気予報を出すためのデータは、各地の気象を観測する、気象台や測候所からの気象データや上空に浮かぶラジオゾンデ(無線上層気象探測機)、アメダス(地域気象観測網)や気象衛星「ひまわり」などから、気象庁にある、アデス(気象資料自動編集集中継装置)に集められます。そして、これらの情報をもとにして、コンピュータによって天気図が作られます。

アメダスは、全国に約1300か所あり、降水量を自動的に測る観測所が置かれています。また、そのうちの840か所では、気温・雨量・日照・風向・風速なども記録できる自動気象計が置かれていて、そのデータが1時間ごとにアデスに送られています。

コンピュータと予報官の判断

天気図ができ上がったから、天気図を気象衛星「ひまわり」からの雲の写真や、気象レーダーからのデータを図にしたものと照らし合わせてみます。それと同時に、この天気図をつくったときの大気の状態が、地上から上空までがどんな状態であったかを、立体的につかみます。

そして、いよいよ、天気を予報することになります。天気予報は、コンピュータの画像をもとに行いますが、最後の判断は、気象予報官が会議をして決めます。

(監修・村山 貢司)

